CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Tsukuba Repository

Culture and its effects on human interaction with design : with the emphasis on cross-cultural perspectives between Korea and Japan

著者	Lee Kun-Pyo
内容記述	Thesis (Ph. D. in Design)--University of Tsukuba, (B), no. 1726, 2001.3.23 Includes bibliographical references
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/2241/5979

【367】

氏　名（国籍）	李（い）　健杓（くんぴょ）（韓　国）
学位の種類	博　士（デザイン学）
学位記番号	博　乙　第　1726　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	Culture and its Effects on Human Interaction with Design-With the Emphasis on Cross-Cultural Perspectives between Korea and Japan- （文化が人間とデザインとの間のインタラクションに及ぼす影響に関する研究 —韓国と日本の比較文化的観点を中心に—）

主　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	原　田　　昭
副　査	筑波大学教授		蓮　見　　孝
副　査	筑波大学教授	工学博士	日　高　健一郎
副　査	生命工業技術研究所主任研究官	工学博士	北　島　宗　雄

論文の内容の要旨

本論文は，文化が人間とデザインの多様な要素とのインタラクションにどのような影響をおよぼしているのかを把握することを目標としている。

先行研究としてのイメージに関する研究の多くは，文化的デザインというテーマについては，各文化別形態や色彩嗜好度などの表層的，審美的な要素だけに焦点が当てられてきた。本論文では，文化的変数という概念を導入し，デザイン変数との関わりについて実証的に検証するという斬新な方法を提案しており，デザイン学の新たな方法論として注目に値する研究である。研究のプロセスとして，電子レンジのデザインと使用について韓国と日本の主として主婦を対象とした緻密なデザインサーベイを行い，文化とデザインとの相互関係についてのデータを収集し解析を行った。本論文は，既存の工学分野の先行研究が文化生成の過程を回避してデザイン方法論を組み立てていた状況に対して文化変数という概念を取りこんで文化とデザインの相互関係の問題に意欲的に取り組み，提案モデルの有効性や課題について実証的に明らかにした。

論文構成は，第1章の序論において研究の目標，方法，範囲について述べ，第2章では文化の本質と定義，研究方法論，関連学問領域について述べ，文化の包括的理解を通じて本研究の枠組みを説明している。第3章では文化変数，第4章ではデザインの構造と方法，第5章では文化の理解のためのシステム開発，第6章ではデザインに関する文化の影響，そして第7章では結論という構成となっている。

「本論」

第1章では，研究の目標，方法，範囲について述べ，第2章では文化の本質と定義，研究方法論，関連学問領域について述べ，文化の包括的理解を通じて本研究の枠組みを説明している。第3章では，文化の特性をどのように把握し文化モデルを形成するのかについて述べている。ここでは，文化の比較を行うために8つの「文化変数」という概念を導入している。「自然に対する観念」，「時間に関する観念」，「人間関係」，「権威に関する観念」，「感情表現」，「メッセージの文脈」，「非言語コミュニケーション」，「規則執着」の8つである。第4章では，文化と比較対照させるためにデザインを評価するための基準となる6つの「デザイン属性」概念を導入した。「機能

性」,「審美性」,「象徴性」,「使用性」,「感性」,「使用者観察」である。第５章では，予備実験として，文化とデザインとのインタラクションとの関係を作り上げる体系の把握を電子レンジを実験資料としてインターネットを用いたネットワークサーベイ手法によって行っている。しかし，ネットワークサーベイは次の実験方法上の諸問題を提起した。①ネットワークを通じることによって生じる「時間遅れの問題」,②ウエブに参加する被験者に「主婦が少なかった」こと，③画面上でのデザイン詳細部の不理解の３点である。第６章では，前章での実験を改良し，韓国と日本の主婦を対象とした電子レンジのユーザビリティについての本実験を実施した。分析結果の主たる内容は次のようである。文化変数については，時間概念，自然観念，人間関係，身分と能力，感情表現に，韓日両国間での差異があった。操作性については，日本人は文脈的判断と操作順序が外側から内側に進めるという傾向があること。嗜好性においては，韓国ではより表現的で，名目的な価値を重視し，日本ではブランドより実質的な価値を重視していること。使用性評価では，韓国は形態的な属性を重視し，日本はインターフェース構造など機能的属性を重視していること。インタラクション形式では，韓国では操作前にマニュアルを読まず，日本では操作前にマニュアルを読むこと。最後に，文化変数とデザイン属性との相互関係をデータにより説明している。

デザイン属性の機能性については，順次的対同時的，原則的対状況的，調和的対統制的，特定的対不特定的等の文化的価値と関係が強い。また，審美性については，感情的対表現的，調和的対統制的等の文化的価値によって説明できること。さらに，象徴的属性は，身分対能力，個人対集団，時間的価値によって説明できると結論付けている。これにより，ある文化的価値を有する人がデザインとどのような相互作用を起こすのかを予測することが可能であるとしている。

結論として，文化とデザインはおのおの異なる階層と属性を持ちながら相互的な関係があることを示し，文化形成の段階的プロセスとデザイン形成の段階的プロセスとの構造的関係をモデル化した。

審査の結果の要旨

本論文は，これまであまり触れられてこなかった文化とデザインの相互作用のモデル化について正面から取り組んだ研究であり，特に韓国と日本の電化製品に対する価値意識とユーザインタフェースデザインに対する相互関係を実証的実験により明らかにした労作である。内容は，理論的枠組み，研究方法，論旨，研究成果の全てにわたって，学位請求論文としての十分な水準に達している。デザインのプロセスにおいて文化的視点を如何に導入するかという具体的な方法を提案し，文化的背景の異なる地域に対するデザインを進めるに当たって文化変数による事前調査の有効性とその方法をまとめた著者の努力と資質は大いに評価できる。以上のようにデザイン学に新たな研究方法を開示し，その有効性を考察した本論文の学術的意義は極めて大きい。

一方，本論文の主題は，文化が人間とデザインとの間のインタラクションに及ぼす影響の解明に置かれているが，デザイン支援としての実践的レベルでの検証がこれからの課題となろう。今後は著者の研究のより現場的，実践的展開を期待したい。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有する者と認める。